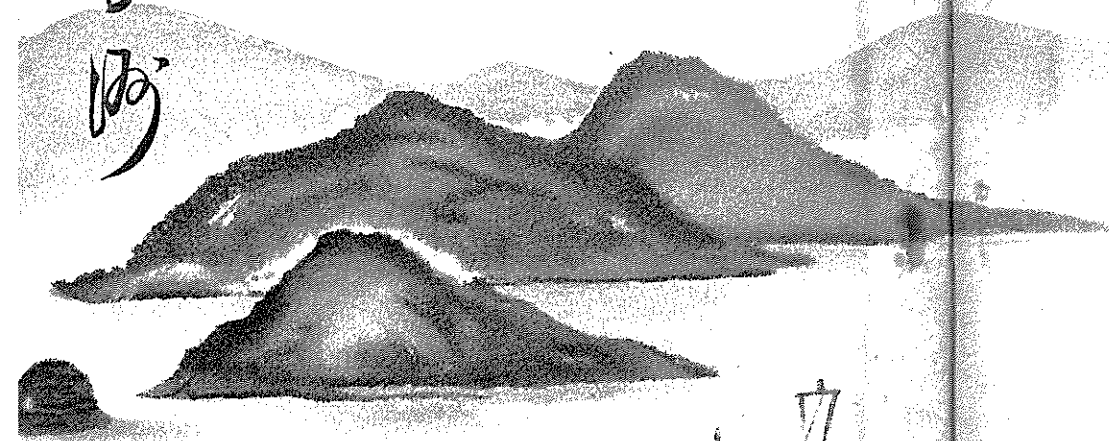
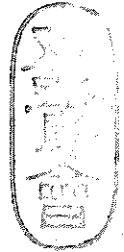


雙
松
河

立
立





雙鷺洲

梁川星巖と三原

我が三原の地は由來頗る形勝に富み、山陽の冠絶、内海の勝概などと云はれ、或人は支那の三湖五湖に比して居る。前面には生口、因島より細島鯨島に至るまで、十指にも餘る島々が列んで居り、中でも大鷺小鷺の二島は、景勝中の中心であり、古來文人墨客の間に、稱揚されてをる。

山水は文を得て更に秀絶と云はれて居るが、眞に其言の如く此地の景勝の人々に賞賛せらるることとは、妙正寺詩集を見れば明かである。特に梁川星巖が細雨春帆雙鷺洲の詩を詠じて以來、一層八ヶ間敷く、島の名も人の名も喧傳せらるゝこととなつた。

(鷺島は豊田郡鷺浦村と云ひ三原市内中央を距ること南々東約一里、糸崎南方半里にあり大鷺廻り三里)
廿一丁小鷺三十二丁

星巖姓は梁川、通稱新十郎、名は孟緯字は公圖、號は初め詩禪後星巖と稱した。美濃安八郡會根村の人、江戸に出で古賀精里に學んだ。明治維新の先驅者であつたことは改めて云ふまでもない。しかし星巖の生命は詩人であり、詩壇の正宗とまで言はるゝ大詩人である。我が長谷川櫻南は其著三家試鈔の中に、茶山は沖澗幽雅餘味を言外に寓し、山陽は格調雄健意趣奇拔なり、星巖は紀

律嚴精一字も苟もせずと言つて居る。

星巖は文政五年九月九日、室紅蘭女史と共に西遊の途に上つた。之は茶山の勸告にも依るが、山陽の九州旅行より四年後のことである。時に星巖三十四紅蘭十九、(星巖安政五年没年七十紅蘭明治十二年没年七十八)青春を味ふに最適の年輩で、人呼んで駱駝旅行と言つた。美濃から伊勢路に遊び六年伊賀に入り、月瀬の梅を賞し、大阪に出で、舟行岡山に到り、庭瀬玉島を過ぎ神邊に來り菅茶山を黄葉夕陽村舎に訪れた。時に茶山は七十六の老詩人、正に七月の中元の日だ。頗る歓迎し詩酒徵逐滯留日を重ねた。次に尾道に來り橋本竹下等に會した。

竹下名は旋字は徳聰通稱元吉、三原川口伊龜の次男橋本徳貞の嗣なる、竹下詩鈔あり

數日の後舟で廣島に向つた。舟中所見の一詩がある。廣島では堺町山口恕輔の敬業堂に宿した。恕輔は西園と號し國老上田家の儒貞、古義學を傳へて居る。中秋の夜天滿町河畔にある西園の別莊岡黄居で觀月の宴を開き、始めて頼杏坪に逢つた。例の如く一鷹一詠頗る歡を盡した。是時車庵も來た。九月九日重陽の日は宮崎木鶴の夜聽亭で再び杏坪と詩酒唱和した。木鶴は通稱與三郎といひ、商賈で詩歌を好む風流人。星巖此所に宿す。

廣島の城南凡そ三里の間皆鹵地なり。即蠣田なり。土人言ふ率ね五六月を以て種を下す、則翌年八九月苗生ず、之を他州に比するに更に肥美なりと言つて一詩を賦して居る。

匝地芭蕉不得潮 時清斥鹵也豐饒

潮々三萬六千頃 一夜寒風長蠟苗

廣島の蠣(太眞乳)と蛤(西施舌)は餘程氣に入つたと見え、詩數首を詠じ種々説明を加へて居る。或る日杏坪は西郊に遊び、歸路星巖の寓居を訪ふ、共に携へて晚甘亭に至つた。主人酒茶を供し共に詩を詠じた。晚甘亭は不明だ。

十月晦日杏坪夜聽亭に來り、星巖之を迎へて共に詩を詠じた。星巖は又席上の水仙花を賦して車庵に贈つた。

十一月二日車庵は晚甘亭で星巖の三原行を送つて居る。それから間もなく諸子景山樓に集まり饒別の宴を催し、翌日舟路三原に向つた。

星巖三原に來る

文政六年十一月上旬星巖三原に來る。星巖は往路には尾道で竹下等に別れを告げ、舟にて直路廣島に行き居ること三ヶ月余、西征の前途遠きにも拘はらず三原に引返して來た。是が詩人の本領であらう。三原では莫逆の友郡築蘇門の讀騷行齋に宿したやうだ。蘇門は名は或字は寧父通稱金三郎虛堂とも號した。三原城主淺野氏の臣、博く書史に涉り古今に通じ材識豪宕慷慨氣節を尙ぶ。

されど世に容れられず退隠して風雅を樂み、落花三十律を作り、心爵を洩らす。吉村秋陽は之に序文と書いた。祖父九郎右衛門は山崎闇齋の門人、男鷺洲は父同様の人物だ。星巖とは真に意氣投合にしたものがあつたであらう。次に交遊の中に丹羽子諱の名が見えるが、之は淺野家の世臣で大丹羽といはれた名家であり、石井豊洲等と交遊して書信も交して居る。

星巖一日蘇門子諱等と如此江山亭に遊ぶ。亭は妙正寺の側にありて三原城を瞰下し、粉堞碧瓦は青松白砂と鹵塩香渺の間に映帶し真に勝境なり。妙正寺は淺野家の菩提寺にて眺望佳く、名を區内に擅にするも、此亭は鬱々開ゆるなく惜むべしとて、左の詩を賦して居る。亭の雨景である。

盤々振策共糞絲 萬頃煙波只眼前

山影纒將雲影合 潮聲已與雨聲連

兜羅寶界依微外 乾婆城麗霏邊

誰在下方遙頂禮 風是日會群仙

西野の梅林は菅公の植えたものと傳説にある處だが。星巖は度々遊んだものと見え、詩も澤山傳へられて居る。星巖曰く、余さきに月瀬の梅花を以て海内無双とした、今三原の梅を見るに及び、乃ち其双あるを知る。彼は幽を以て勝り、此は平曠による、竹橋茅屋境各佳處あるのみと、中々能く譽めて居る。因より今日の如く荒れ果てたものでなく、烏梅を取るために樹は山中、大濱

邊にも澤山有つた様である。

梅花不見品聞香 遍野漫山春渺茫

非有鼻神能諦觀 直須喚做白雲鄉

我來欲與梅爲友 梅自清凜我自飢

但得結廬花底住 略同築墓近要離

蓼杖重尋前度村 瑤妃微笑立黃昏

不須春月開粧鏡 且只聞香也斷魂

哆參誰能容口吻 清姿高格本無双

一般疎影杏花月 爭奈遣山心不降

幽討從他村路長 小橋流水帶斜陽

三枝兩枝寒弄影 五里十里雪吹香

微雨繁中殊不惡 傲然換酒也何妨

好教羣羽呼眠醒 又是浮山夢一場

書生不當世相惜 黃老稀疎白老非

唯有梅花能好事 且容纒纒賦詩來

最終の分は詩集になきものだ。中々梅林も氣に入つたものと見える。

文政七年二月晦日都筑寧父や丹羽子諄等の人々と糸崎に遊んだ。是が問題の名詩である。

二月晦日拉都寧父諸子遊糸崎海上有大小鷺洲

詩酒還成半日遊

此生隨處送悠悠

他年夢裡問陳迹

細雨春帆雙鷺洲

詩酒還成半日遊

此生隨處に悠悠を送る

他年夢裡に陳迹を問はば

細雨春帆雙鷺洲

此詩については彼是の批評を試むる人もあるが、格調の良否は吾人の知る處にあらず。其心裡に映する處を能く表現し得たことに就ては、全く滿點と信するものである。是が名もなき青年詩人の詩が當時盛んに喧傳せらるるに至つた所以ではあるまいか。是即山水は文を得て更に秀絶、文は山水に遇ふて益高潔と言はれた言の、我々を欺くものでないことを示すものである。

玉香と言ふ人は廣島の書肆文華堂であつて、姓は加藤名は淵字は珠文通稱兵助、香園又は文華堂と稱し詩文を良くす。文政十七家絶句、玉香園叢書等の著書がある。星巖の雙鷺洲の詩を見て一

詩を詠して贈つた

小杜嘗稱趙倚樓

道般好句人爭誦

崔鶯鄭例尤稱

蓋目公爲梁鷺洲

梁鷺洲の別名を授與し、此の三字で星巖と雙鷺洲とを離るべからざるものとした。星巖戯れに之に答へて

詩酒江湖汗漫遊 名聲敢望昔賢儔

有_レ綠他日來投_レ老 合_レ署_三陳人梁龍洲_一

星巖の得意思ふべしだ。當時既に斯くの如し、其の能く後世に傳ふる所以も亦こゝにあるので、其れ以上に彼此云ふ必要はないと思ふ。

星巖は亦八幡にまで杖を曳いたと見えて、八幡八景を詠じて居る。詩集には三首だけを存して居る、今は其餘のものを載録する。

彭祖瀧避暑

彭鏗去來久、剩聞_三崑瀑吼_一、澗邊須更求、恐有_三堯時悲_一

龍王峯紅霞

海龍朝_三王府_一、鹵簿嚴相聯、遺却_三双紅旆_一、于_レ今在_三嶺巔_一

鋒鋒秋月

孤輪影_三湖高_一、澎氣溢_三天宇_一、万壑與_三千巖_一、秋毫眞可_レ數

障子岳暮雪

盡日天_三醞_一雪、峰雲撥不_レ開、暮風時一掃、映出_三玉千堆_一

虛空藏眺望

芥子納_三須彌_一、此事何足_レ怪、山陽三万島、總落_三寸眸内_一

終に政申(文政七年甲申)上已前五日題_三于黃微讀騷行齋_一都筑蘇門の宅(時山雨弄_レ晴桃花始綻と書いて居る。其他御調坂夜雨の詩等もありて、三原周邊を跋渉したらしむ。

平田玉蘊玉葆の姉妹は尾道御所町、一里塚に住して家號を福岡屋といひ、父は新太郎五峰と云ふ畫家の娘だ、共に四條派の畫を學び、姉玉蘊頗る勝れて、山水人物花鳥を善くす、その山陽と交遊ありしことは人の知る所で、今更喋々の要はない、玉葆は一旦三原大原屋某に嫁したるも離縁になつたようだ、星巖は玉蘊の美人讀書の圖と玉葆の常盤抱孤圖とに題して居る。

田氏女玉蘊畫美人讀書圖

隔花鶯語太丁寧 喚得_三卿々春夢醒_一

畫漏滴殘庭院靜 倚簾悄讀牡丹亭

田氏玉保畫常盤抱孤圖

雪壓_三笠檐_一風卷_レ秋 呱々索_三乳若爲情_一

他年鐵拐峰頭嶮 叱咤_三三軍_一是此聲

此の常盤雪行の詩は雙鷺洲の詩と同じく、古今絶唱と呼ばれ、人口に膾炙した。鐵拐詩人と云ふ印を造つて、贈つた人もあつたといふことだ。

双鷺常盤の二詩共に海内喧傳の絶唱といはれ、しかも共に三原逗留中の壯年作である。星巖が胸中如何に快然たるものがあつたであらう。思ふに他年夢裡を待たずとも、幾度か彼の胸中に通ふものがあつたであらう。

雪夜寄懷宏上人

細竹窓前簾々聲 撥簾急雪灑吟燈

山中應更多清事 閑憶歎冬花下僧

歎冬は批把の事だ。宏上人は不明、宗光寺邊の僧か。

除夕戲題

分歲無錢買一杯 坐將悶字畫爐灰

如何五鬼獨情厚 逐我慇懃千里來

詩成つて夫妻哄笑して一杯を傾けしこと追想するに餘りあり。一竿の筆を拂へ加之も夫妻同行の

駝駝行。暨ひ五鬼彼を逐來らずとも囊中自ら錢あるの道理なく、悶字を爐灰に畫くは尤のことと思はるるに。人も吞氣なれば時代も吞氣、一觴一吟詩酒微逐是れ日も足らず、遂に長崎まで旅行し得たとは。現今我等の夢想し得ぬ所で、轉た時世の變遷を思はしむるものがある。

早春雜興

幽窓夢破鳥聲譁 海日曠々透碧紗

起汲井華換瓶水 寒梅尙活去年花

堅臥貪眠不出爐 東風巷陌雪銷初

暗知今日是人日 惟髻邨姑叫賣蔬

檐牙鳥雀弄和聲 漸覺朝來睡不輕

呼婢震帷春已好 遠峯靄々黛螺橫

星巖が三原を去つて廣島に行つたのは三四月の候である。臨別の詩は「余が三原に寓する梅花方に綻ふの時を以て來り、吉嶺始て肥ゆる時を以て去る。其間十餘句、都寧父丹子諱の輩と詩酒談

笑殆と虚日なし、別れに臨んで留題す」とて

西曉梅花夢尙新 醉魚沫已殘春

不知風物能多少 勾得夫君住十旬

此の詩の後に「沼田郡安置郷(豊田郡能地)海上毎年二三月の交、棘鱈魚あり、浮游醉へるが如し、漁人争ひ捕へて以て賣る、其味豊膩なること絶倫なり、國史を按ずるに、神皇后淳田門に至り、海鰯多く船傍に集る、后酒を以て魚に瀝く、魚酔ふて浮くと言ふ即是なり」と。國史は日本書記のことだ。今も猶能地の浮鰯と言つて有名である。

以上の如く星巖の三原に來たのは十一月の初めで去つたのは三月の末頃でもあらう。狭い城下に百數十日の滞在は慥に彼の心を引く何物かがあつたことが知られる。

夫れから星巖は廣島に一月位滞在して七年五月防長より九州路に向つて出發した。

歸路は翌八年正月十三日、下關を發して舟行廣島に歸り。例に依り交游、漸く六月三日再び三原に來る。此時の詩

重抵三原

一望城海意便揚 故人多處即吾郷

市喧遙見商漁集 樓出如聞卷畫香

澹菜鱸魚皆種藝 荒烟白鹵幾亭場

江山果解容高詠 擬買扁舟作漫郎

一ヶ月余りも三原に居り、間もなく尾道に行き病んで三ヶ月余り逗留し、十一月初め神邊に至り數日逗留して去つた。是が藝備の星巖に對する全部だ。

尾道から蘇門に寄せた詩を以て最後とす。

雨夕聞歌寄都寧父

紅蕪枕寒人已非 江花江草夢依稀

黃昏水閣瀟々雨 猶唱當年胡蝶飛

雙鷺洲に就いての文人墨客の吟詠は數ふるに暇無き程あり、事實瀬戸内海中にも三原海上の多島群は幾多の様相を呈して勝景を添へ其中心點たる雙鷺洲。若し之に適當の施設を加へ交通を容易ならしめば、觀光地として絶好の場所たらんことは期して待つべきである。又斯くすべきは地方人の一大責務である。今は最近數年の愛賞者を擧げて此稿を終ることとする。

友人高亀良樹君は多年糸崎療病院を經營して朝夕雙鷺洲を眼前に眺め、多島海絶景中の絶景と感じ、來院の人々に之を語り、誇りとして居た。或時水彩畫の巨匠丸山晩霞に逢ひしに彼は一見到

底繪筆も及ばぬものと激賞し、當時國立公園に入れられざるを怪んだ。

土佐の人板垣翁の輩下濱田梅莊に逢ひ種々景勝を語り遂に伴ひ歸り例の星巖詩を揮毫せしめた。赤十字社副社長坂本鈺之助氏は激賞の餘り次の詩を詠じた。

客程詩思怕秋風

細雨春帆夢亦空

双鷺何邊洲樹遠

星巖陳迹夕陽中

氏は詩界の雄にして、頻圖と稱す。

昭和十三年入澤達吉博士（號雲莊）探勝を試み、高龜君博士を案内し神邊、柄、尾道を経て糸崎に着いた。博士觀望眼前の景に見とれる時、恰も細雨降り來り、歸りを急ぐ帆舟の往來繁く、全くの眺へ向きなり、博士は絶景々々の聲を絶たず、即座に次の詩を認めた。

細雨春帆半日遊

客中詩酒足風流

百年陳迹留佳話

羨殺高人梁鷺洲

後博士より星巖自筆の雙鷺洲の詩幅を贈らる。高龜君感激の餘遂に詩碑建設を企て、同志相謀り糸崎八幡社前雙鷺洲眼前の地に之を實現するに至つた。（昭和二二、二二、二九、澤井龍南稿）

本冊子は詩碑建設と共に主として高龜博士の美志に依る

昭和二十三年四月

三原圖書館